日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
教会教育部

教会学校　教案ガイド

教師メモやメッセージアウトラインを読む前に必ずディボーションをしましょう。

1．みことば

祈りながら今週のテキスト（聖書箇所）を何度も繰り返し読んでください。また、今週の暗唱聖句を決定して、憶えましょう。

2．主題の読み取り

今週のみことばの中心テーマを自分のコトバで、1つの文章にまとめて書きあらわしましょう。

例　○：イエスさまは、弟子たちがイエスさまを救い主と信じるように
カナで奇跡を行いました。（×：カナの婚礼と奇跡）

3．教えられたこと

今週のみことばを通して、神さまがあなたに語ってくださったことを書きあらわしましょう。

4．メッセージの作成

◇「教師ノート」と「メッセージアウトライン」を参考にしてください。
◇注意深く聖霊さまの導きに従いましょう。

教会教育部公式サイト　http://ce.ag-j.or.jp/

教会の働きのためにご自由にお使いください。営利目的での使用は禁じます。
すべての内容の著作権は、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団教会教育部にあります。

教　師　ノ　―　ト

日付	2019年　3月　3日
単元	マタイの福音書・3
テーマ	神を愛し、人を愛する者となる
タイトル	いちばん大切なこと
テキスト	マタイ22：34～40
参照箇所	申命記6：5、レビ19：18、マルコ12：28～31、ルカ10：25～37

暗唱聖句（教会で使用している聖書訳を記入して下さい）
マタイ22：37、39

AG 日曜学校教案参照箇所

❑導入

パリサイ人と呼ばれる人が、イエスさまに「聖書の中で一番たいせつなことは何ですか？」と質問をしました。みなさんも、その答えを知りたいと思いませんか？

❑ポイント1　律法の中で、たいせつな戒めはどれですか？（34－36節）

イスラエルの神さまを信じる人たちの中には、旧約聖書の律法の教えを厳しく守っていた、パリサイ派というグループがありました。この人たちをパリサイ人と呼びました。聖書の教えを守ることは、大事なことです。しかし、彼らは間違った考えを持っていました。「律法を守っている自分たちだけが、神さまに愛され、救われる資格がある」といって、イエスさまを救い主だと認めようとしませんでした。また、彼らは「律法を全て守る自分たちだけが偉い」と考え、他の人を見下して、付き合おうとしませんでした。

ある日、パリサイ人の律法の専門家が、イエスさまを、困らせようとして、難しい質問をしました。「先生、聖書には、盗んではいけない、殺してはいけない、〇〇してはいけない、とたくさんの戒めがあります。いったい、どれが一番たいせつなのですか？」イエスさまが、うまく答えられなかったら、その言葉じりにつけこんでやろうとしていたのです。そして、イエスさまを言い負かし、逮捕したいと考えていたのです。

✎パリサイ人の解説は省略しても良い。

❑ポイント2 「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くしてあなたの神である主を愛しなさい」（37－38節）

これは、パリサイ人や律法学者たちが、必死で守っていた申命記6：5のみことばです。

「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽して」とは、どういう意味でしょうか。心・思い・知性は、「私たちの内にあるものすべて」です。私たちの感じること、考えること、気持ち、喜び、悲しみ、楽しみ、決心、やる気・・・すべてのことです。ですから、私たちのすべて（全存在・全人格）で、イエスさまを愛しなさいということです。

「愛する」とは、大切にすることです。だれかを「愛する」というとき、その相手を大切にします。相手を大切にするということは、相手の気持ち（心）を大切にすることです。相手がどういう気持ちかを、思いやって、そのとおりにする（尊重する）ことです。「神さまを愛しなさい」というのは、神さまの気持ち（みこころ）を考えて、そのとおりにすることです。

ですから、第1の戒めは、いつでも、神さまがどんな気持ちかを、心も頭も精一杯使って考えること。家にいるときも、学校にいるときも、イエスさまがどうして欲しいかを、一番に優先して考えること。そして、私たちの内のすべてを出し切って、精一杯みこころのとおりに、行動すること。それが、心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、神さまを愛するということです。

イエスさまは、「これが、たいせつな第1の戒めです」と、キッパリお答えになりました。

✎神さまは、私たちのことを、イエスさまの命よりも大切だ（高価で尊い）ということを示してくださいました。だから、私たちも、神さまを愛するのです。

❑ポイント3 「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」（39－40節）

これも、パリサイ人が良く知っている、旧約聖書レビ記に出てくるみ言葉です（レビ記19：18）。「隣人」とは、いったいダレのことでしょうか（例：学校で隣の席の人、近所の人、友達など）？イエスさまがおっしゃっている「隣人」の中には、もちろん「あなたの周りにいる人」という意味があります。ですから、学校・教会・近所の友だち、家族・兄妹・親戚など、あなたの周りにいる人を、愛しなさいということです。しかし、それだけではありません。聖書で「隣人」と言う時は、「あなたの助けを必要としている人」のことです※。それがだれであるかは、みなさん自身が、よく気付いているのではないでしょうか？（いじめられている人、仲間外れにされている人、障害をもっているお友だち、困っている人など思い起こせるはず。）

「あなた自身のように愛する」とは、どんな意味でしょう？人はだれでも、自分が一番たいせつです。自分の気持ちを分かってほしい、自分の願いをきいてほしい、といつも願っています。「あなた自身のように愛する」とは、自分にして欲しいと願うことを、相手にもすることです（マタイ7：12）。

ですから、第2の戒めは、自分の気持ちを分かってほしいと、相手に願うように、助けを求めている人の気持ちを理解してあげることです。そして、その人のそばに行って、自分から隣人になり、自分がして欲しいのと同じように、助けることです。

イエスさまは、これは第1の戒めと同じくらい大切だと教えてくださいました。

※隣人とは誰か？の質問にイエスは「良きサマリヤ人」の例えでお答えになった（ルカ10：25～37）。また、金持ちの青年に対しては、隣人を愛する方法として、貧しい人に財産を分けることを教えられた（マタイ19：16～21）。そのことから、ここでは小学生にわかるように「隣人＝あなたの助けを必要としている人」とした。隣にいる人が隣人ではなく、自ら進んで「隣人になる」ことが大切。

✎自分を愛することも、第2の戒めの一部です。教師は、自分を愛せないお友だちには、個人的に対応するようにしてください。

❑結論　イエスさまは、神さまを愛し、人を愛することが一番たいせつだと教えてくださいました。

例話：十字架は、タテとヨコの線でできています。タテは神さまを愛する第1の戒め、ヨコは隣人を愛する第2の戒めをあらわしているように見ることができますね。

❑適用 （聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう）

1. イエスさまの気持ちを、一番に大切にしよう！　私たちのすべてで、いつも精一杯お祈りし、賛美し、礼拝しよう。精一杯、聖書を読み、メッセージをきき、ディボーションし、神さまのみこころを知ろう。そして、精一杯、みこころのとおりに行動しよう。これが神さまを愛するということです。「一番たいせつなこと」ですから、今日から守っていきましょう。

2. あなたの助けを必要としている人の気持ちを考えて行動しよう！　あなたの助けを必要としている人を思い起こしましょう。あなたが、その人の立場だったら、どうして欲しいかを考えましょう。そして、あなたがして欲しいと思うことを、その人にしましょう。困っている人だけでなく、あなたの関わる人、すべてに対して、自分と同じように、相手の気持ちを思いやることを心がけましょう。

教　師　ノ　―　ト

日付	2019年　3月10日
単元	マタイの福音書・3
テーマ	再臨を喜んで迎えられる者となる
タイトル	目をさましていなさい
テキスト	マタイ25：1～13
参照箇所	使徒1：3～11

暗唱聖句（教会で使用している聖書訳を記入して下さい）
マタイ25：13

AG 日曜学校教案参照箇所

❑導入

イエスさまは、地上での生涯の後半になると、十字架にかかること、3日めによみがえること、天に戻ってから再びこの地に来られること（再臨）について、弟子たちに譬えをお話しになりました。

❑ポイント1　イエスさまは、花婿を出迎える10人の娘のたとえ話をなさいました（1～5節）

10人の娘のお話です。この10人は、これから結婚式を挙げる、花嫁のお友だちです。ユダヤの結婚式では、夜に、花婿（とその友だち）が、家に花嫁を迎えにやってくるのが習慣です。この10人の娘は、夜に到着する花婿を、ランプをともして迎え、花嫁の家で行なわれる祝宴（パーティ）に案内するお手伝いをするために、花嫁の家に集まっていたのです。

10人のうち5人の娘たちは、花嫁の家に、ランプだけ持って来ていました。イエスさまは、この5人を「愚かな娘たち」とおっしゃいました。あとの5人は、それに比べて「賢い娘たち」でした。花嫁の家に来る時に、ランプだけでなく、予備の油を、他の入れ物に入れて持って来ていました。油がなくなると、ランプの火がつかないからです。

10人の娘は、花婿が来るのを楽しみに待っていました。しかし、夜になっても、なかなか花婿は現れません。花婿の到着が遅くなったので、娘たちは眠り始めました。

❑ポイント2　賢い娘たちは、花婿がいつ来てもいいように用意ができていました（6～12節）

夜中になって、外で大きな声がしました。「花婿がそろそろ到着しますよ。迎えの役の娘たち、どうぞ出て来てください。」 眠っていた娘たちは、飛び起きました。そして、自分のランプを準備しました。ところが、時間がたっていたので、娘たちのランプはみな、火が消えかかっていました。賢い5人の娘たちは、用意していた油を注ぎ足して、ランプの火を整えました。ところが、他の5人は、油がないので困りました。そこで賢い娘たちに頼みました。「火が消えてしまいそうです。これでは花婿を迎えることができません。どうか油を少し私たちに分けてください」。 ところが賢い娘たちは答えて言いました。「ごめんなさい。あなたたちに分けてあげるには、油が足りません。お店に行って、買って来るしかないですね。」 そこで愚かな娘たちは、急いで油を買いに出かけました。するとその間に、花婿が到着しました。賢い5人の娘たちだけが、花婿を迎えることができました。彼女らが、花婿と一緒に祝宴の部屋に入ると、戸が閉められました。しばらくして油を買いに行っていた娘たちが帰ってきました。「ご主人さま、ご主人さま。どうか戸を開けて、中に入らせてください。」 しかし、部屋の中からは「私はあなたがたを知りません」と答えが返ってきました。彼女らは、祝宴の中に入ることができませんでした。

❑ポイント3　イエスさまは、「目をさましていなさい」とおっしゃいました（13節）

イエスさまは、このたとえ話の最後に「だから目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです」とおっしゃいました。

このたとえ話で、花婿はイエスさまのことです。迎える10人の娘たちは、私たちクリスチャン（教会）を

あらわしています。イエスさまは、十字架にかかり、3日めによみがえった後、天に戻られる時、再びこの地に来られることを、約束なさいました（使徒1：3～11）。その約束どおり、イエスさまは必ず来られます。イエスさまは、ご自身の再臨の時まで、私たちがどのように待つべきかを教えるために、このたとえ話をなさったのです。いつイエスさまが来られるかは、誰も知りません。ですから、イエスさまは、いつ来られても大丈夫なように、いつも「目をさましていなさい」とおっしゃったのです。

❑結論　いつイエスさまが来られても大丈夫なように、準備して待つことが大切です

「目をさましていなさい」とは、私たちクリスチャンは、「いつイエスさまが来られても、喜んでお祝いできるように備え、注意深く用心しておきなさい」という意味です。賢い娘たちは、いつ花婿が来ても大丈夫なように、準備ができていました。いつでも花婿を迎えられるように備え、注意深く用心していたのです。

❑適用　（聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう）

普段から、イエスさまとよい関係で過ごしましょう！　私たちにとって「目をさまして待つ」とか「賢い娘たちのようになる」ということは、「イエスさまといつもよい関係でいること」ということができます。私たちは、イエスさまを信じる信仰によって、間違いなく、天国に行きます。だからと言って、いつもイエスさまを悲しませるような生活をしていたら、再臨のとき、喜んでお迎えすることができませんね。普段から、イエスさまと良い関係であれば、突然イエスさまが来られても、困ることはひとつもありません。

1．いつもイエスさまに喜ばれることを考えて行動しよう！　普段、イエスさまを悲しませるようなことばかりしていては、堂々とイエスさまに対面できませんね。イエスさまの気持ちに背を向けて過ごしていては、再臨のとき、喜んでお迎えできませんね。いつも、「イエスさまが喜ばれることは何か？」を考えましょう。イエスさまのみこころは何か、お祈りしたり、聖書を読んだりして、知るようにしましょう！ イエスさまを礼拝すること、賛美すること、感謝すること、お友だちを愛すること、両親に従うことなどは、イエスさまが喜ばれることです。すすんで実践しましょう。

2．もし失敗したときは、素直に悔い改めよう　私たちは、いつもイエスさまに喜ばれる心で「完璧に」過ごすことはできません。ですから、イエスさまのみこころに従えなかったとき、自分中心になってしまったとき、心の中で罪を犯してしまったときは、すぐに悔い改めのお祈りをしましょう。悪いことをしたのに謝らないままにしておくと、よい関係ではいられませんね。イエスさまは、私たちが悔い改めるとき、必ず赦し、よい関係を保ってくださいますから、大丈夫です。再臨のとき、責められることは決してありません。イエスさまは、私たちの心をみておられます。自分の心を常に注意深く点検し、イエスさまに悪いなぁと思うことがあったら、素直にお祈りしましょう。まだ悔い改めていない罪があると感じたら、今すぐお祈りしましょう。

※イエスさまとの関係は、油のように、他の人から分けてもらうことができません。お店で買えるものでもありません。普段から時間をかけ、自分で、イエスさまと個人的に築き上げていくものです。

※昇天から2000年以上たっているので、待ちくたびれて「もう来ないんじゃないか」「来るとしても、まだまだ先のことだろう」と愚かな娘たちのようにならないようにしましょう。いつ来られるかは誰にも分からないので、いつも目を覚ましているようにと言われたのです。

教　師　ノ　―　ト

日付	2019年　3月17日
単元	マタイの福音書・3
テーマ	忠実なしもべになる
タイトル	忠実なしもべ
テキスト	マタイ25:14～30
参照箇所	ルカ19：11～27、16：10、Ⅰテモテ1：12、ヘブル2：17、黙示録2：10

暗唱聖句（教会で使用している聖書訳を記入して下さい）
マタイ25：21

AG 日曜学校教案参照箇所

❑導入

イエスさまは、父なる神さまの願いに従って十字架にかかろうとする前に、弟子たちにも忠実にいきることをお話しになりました。

❑ポイント1　主人はしもべたちに自分の財産をあずけました（14－18節）

主人は旅に出掛ける時に、しもべたちを呼んで、自分の財産を預けることにしました。主人はしもべたちの能力にしたがって、5タラント、2タラント、1タラントを渡して旅に出かけて行きました。タラントをあずけられなかったしもべはいませんでした。

✎1タラントは、6千デナリに相当します。1デナリは、1日の労働賃金に相当します。1タラントで6千日分の労働賃金に相当すると単純計算できますが、当時ローマの兵卒の年棒は300デナリだったと言われていますので、1タラントは、ローマの兵卒の20年分の労働賃金に匹敵します。タラントの額はあまりにも大きく、日常生活では使われていませんでした。

✎5タラントと1タラントの差は5倍のように感じますが、日常生活の額としてはあまりにも大きいので、不公平感は感じられなかっただろうと思います（たとえば5兆円もらうのと1兆円もらうのとで、日常生活で大差がないのと同じようなもの）。むしろそれほど大きな財産を（給料とは別）、しもべにあずける主人の気前のよさ、しもべを信頼している思いがどれほど大きいかが分かります。

✎「その能力に応じて・・・タラントを渡し」（15）とされることから、英語のタレント（talent　才能・能力）の語源となりました。

❑ポイント2　主人が帰ってきて清算をしました（19－30節）

主人が旅に出かけている間、しもべたちは主人から預かったタラントを用い、5タラントを預かったしもべは別に5タラント、2タラントを預かったしもべは別に2タラントをもうけました。しかし1タラントを預かったしもべは、その1タラントを地に隠してしまいました。

やがて主人が帰ってきて、清算をすることになりました。別に5タラントをもうけたしもべ、別に2タラントをもうけたしもべが報告をした後、1タラントを預かったしもべはその1タラントを用いることなく地に隠したことを報告しました。その結果、1タラントを地に隠したしもべは、預かった1タラントを取り上げられてしまいました。

✎1タラントを預かったしもべは、主人が自分の財産の1タラントをしもべであるにも関わらず預けてくれるという主人の心の大きさ、そしてしもべへの信頼に気づきませんでした。むしろ主人のことを「ひどい方」と思っていました。これは主人に対する「誤った評価」（新聖書注解）です。（26）の「私が蒔かない所から

刈り取り・・・知っていたというのか」という主人の言葉は、しもべの主人への評価を肯定しているものではありません。「ひどい方」と思っていたのなら、どうして銀行に預けることをしなかったのかと（27）、しもべの怠慢さを指摘している言葉につながっているものです。

＊神さまのことをどのように思っているかは、子どもたちの信仰に大きな影響があります。

❑ポイント3　主人は忠実に働いたしもべを喜びました（21、23節）

主人は、タラントを別にもうけたしもべたちのことを喜びました。5タラントもうけたしもべにも、2タラントもうけたしもべにも、まったく同じ言葉をかけて喜んでいます。これはたくさんもうけたからたくさん喜ばれるということではなく、しもべたちの忠実さに対する喜びの言葉です。

❑結論　主人が忠実に働いたしもべを喜んだように、神さまも私たちが忠実に生きることを喜ばれます。

❑適用　（聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう）

このたとえ話は、イエスさまが十字架にかかる前に弟子たちに話されたものです。イエスさまは父なる神さまの御心（願い）に従って、忠実に十字架の道を歩まれました。イエスさまも私たちの模範となって、忠実に歩まれたのです。

どんな人にも神さまからタラント（能力）が与えられていて、神さまのために何かをすることができます。それは人と違っていてもかまいません。忠実に、あきらめないで、そのことをしていくなら、父なる神さまは大喜びしてくださいます。家族や教会のことで神さまのためにどんなことができるかを考えてみましょう。（子どもたちが何か1つ決心できるように、その場で考える時を持ちましょう。考えられない子どもたちのために、教師は助け舟を出したり、事前に子どもの適性を判断しながら考えて、「こんなことはどう？」と提案してみるのもいいでしょう。）

1. 家族のことで、神さまが「このことをして欲しいなぁ」と願っていることがあると思います。お父さんやお母さんのお手伝いで以前やっていたけれども、今はやめてしまっていることはありませんか？弟や妹の面倒をみること、家で飼っているペットの世話などなど。できるのにやらなくなっていることはありませんか？

2. 教会のことで、みんなの出来ることはどんなことでしょう？教会学校に早く来てイスを並べること、大きな声で賛美すること、お掃除や後片付けもあるでしょう。今ピアノなどを習っていたら、やがて教会学校の奏楽が出来るように練習することもあります。絵の上手な人は、お友だちに絵葉書を書いたり、大人の礼拝中に小さい子の面倒を見ることなどもあります。何にも出来ない人は一人もいません。みんなにタラントが与えられています。自分に何が出来るか分からない人は、先生に尋ねてみてもよいでしょう。そしてそのことを忠実にコツコツしていくことを神さまは喜ばれます！

教　師　ノ　―　ト

日付	2019年　3月24日
単元	マタイの福音書・3
テーマ	十字架を信じ、感謝する者となる
タイトル	どうしてわたしをお見捨てになったのですか
テキスト	マタイ26:47～27：50
参照箇所	マルコ14：41～15：37、ルカ22：47～46、ヨハネ18：1～19：37、Ⅰペテロ2：22～25、イザヤ53、ローマ3：23～24、Ⅰヨハネ1：8～9、ヨハネ3：16、Ⅰテモテ1：15、使徒16：31

暗唱聖句（教会で使用している聖書訳を記入して下さい）
マタイ27：46　or　ヨハネ3：16　orⅠテモテ1：15

AG 日曜学校教案参照箇所

❑**導入**　イエスさまは、十字架にかかるため、エルサレムに入られました。

❑**ポイント1　イエスさまは不当な裁判にかけられました（26：47～68、27：1～2、27：11～25）**

■**逮捕**　イエスさまは、十字架にかかる前夜、ゲッセマネでお祈りをしておられました。そこへ、弟子のユダがやって来ました。剣や棒をもった群衆と一緒です。ユダはイエスさまを裏切り、その居場所を祭司長や長老に教えたのです。イエスさまは何の抵抗もなさいませんでした。弟子たちは、みなイエスさまを見捨てて逃げてしまいました。

■**裁判**　イエスさまを捕まえた人たちは、大祭司カヤパのところに連れて行きました。祭司長たちは、夜中に裁判を始めました。彼らは何とかしてイエスさまを死刑にする口実をみつけようとしました。「こいつは、自分を神の子だと言って、神さまを汚している！」そう言って、イエスさまを死刑にするべきだと決めました。人々は、イエスさまの顔につばをかけたり、殴ったり、馬鹿にしたりしました。

■**ピラト**　夜が明けると、祭司長たちは、イエスさまを縛って、総督ピラトのところに連れて行きました。そのころ、ユダヤの国はローマ帝国の統治下にありましたから、死刑にするかどうかは、ローマの総督ピラトが決めるのでした。総督ピラトは、祭司長たちが、ねたみからイエスさまを死刑にしたがっていることも、イエスさまには罪がないことも、知っていました。しかし、人々が非常に激しく「イエスを十字架につけろ！」と訴え続けるので、とうとう「私には責任がない。自分たちで始末するがよい。」と言いました。

❑**ポイント2　イエスさまは人々からあざけられました（27：26～31）**

■**鞭打ち**　ピラトは、兵士たちに、イエスさまを鞭で打つように命令しました。兵士たちは、上半身を裸にし、太い柱に両手を広げて抱くようにして縛りつけ、イエスさまを鞭で打ちました。鞭と言っても、とがった金属やガラスや動物の骨の鋲が埋め込まれている鞭です。皮膚も肉も引き裂かれ、骨が見えるほどになったかもしれません。ピラトは、これ以上打てば、死んでしまうというところで、イエスさまを兵士たちに引き渡したと考えられています。

■**嘲弄**　兵士たちは、傷だらけのイエスさまに、緋色の上着を着せ、いばらの冠をかぶせました。そして、王さまにみたててからかうためです。「ユダヤ人の王さま、バンザーイ！」 さらにイエスさまに、つばを吐きかけたり、頭をたたいたりしてからかいました。そのあげく、今度はさっきの着物を、イエスさまの傷らだけの体から脱がせ、またもとの着物を着せました。

■**十字架**　ローマ兵たちは、イエスさまに十字架を背負わせ、ゴルゴダの丘に連れて行こうとしました。しかし、イエスさまの体は、もうそれができる状態ではありませんでした。それを見かねた兵士が、途中からクレネ人シモンという人に、イエスさまの十字架を負わせるほどでした。やっと兵士たちは、イエスさまの手と足に、太い釘を打ち、十字架につけました。十字架は、最も残酷な刑罰でした。この状態で、何時間も苦しみ、死んでいくのです。道を行く人々は「オマエが神の子なら、自分で十字架から降りてみろ！」とののしりました。祭司長や律法学者たちも「人は救えても、自分は救えないのか。神の子だった

ら、神さまに救ってもらえるはずだろぅ！そうしたら、信じてやってもイイぞ！」とばかにしました。イエスさまの隣で十字架につけられた犯罪者たちも、同じようにイエスさまをののしりました。

❑ポイント3　イエスさまは、十字架で息を引き取られました（27：45～50）

■最期　イエスさまは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。そして、もう一度大声で叫んでから、とうとう息を引き取られました。

❑結論　イエスさまは、私たちの身代わりとなって、十字架にかかって死んでくださいました

イエスさまは、最後に「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」叫ばれました。しかし、父なる神さまから見捨てられるのは、本来なら、私たちのはずでした。イエスさまが、こう叫んで十字架で死なれたのは、私たちの身代わりとなるためでした。私たちは、神さまに造られ、神さまに愛されています。でも人間は神さまを無視して、自分勝手に生きてしまいます（これを罪といいます）。神さまに背いてばかりいるなら、神さまから見放され、永遠に神さまとの関係が断たれても仕方がありません（永遠の死）。

しかし、神さまは、私たちを、見捨てませんでした。ご自分から私たちの罪を赦し、永遠の命を与える計画をたててくださったのです。そのために必要なのが、私たちの身代わりとなって、ささげられる命でした。神さまは、私たちの命を救う代わりに、たいせつな御子の命を捨ててくださったのです。すべての人が受けるべき刑罰を、イエスさまが身代わりとなって受けてくださったので、私たちは、決して見捨てられることなく、神さまと永遠にともにいることができるのです。神さまは、それほどまでに、私たちを愛してくださっているのです。神のひとり子なるイエスさまは、完全な身代わりでした。ですから、イエスさまを信じるだけで、すべての人の罪は赦されるのです。

※教師は次の箇所を必ず読んでください→Ⅰペテロ2：22～25、イザヤ53、ローマ3：23～24、Ⅰヨハネ1：8～9、ヨハネ3：16、Ⅰテモテ1：15、使徒16：31

✎イエスさまが「なぜお見捨てになるのですか」と叫ばれました。父なる神さまにとって、愛する御子イエスさまを見捨てなければ、救いの計画は達成されません。最も大切な子を助けずに、人類の救いを成し遂げるという究極の辛さです。イエスさまも、それを承知して従い、十字架にかかってくださったのです。イエスさまは私たちが叫ばなければならない言葉を代わりに叫んでくださったのです。

❑適用　（聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう）

1. イエスさまを信じよう！イエスさまを信じるなら、永遠の命を手に入れることができます。それは、永遠に神さまから見捨てられず、ず～っと一緒にいられるということです。天国に行くことができるのです。イエスさまが身代わりに犠牲になってくださいました。これほどのことを実行してくださるほどに、神さまは私たちのことを愛してくださっているのです。今まで神さまに背いて、自分勝手に生きてきた罪を告白し、イエスさまを信じるお祈りをしましょう。

2. クリスチャンのみなさんも、もう一度、イエスさまの十字架に感謝しよう。イエスさまが、裏切られ、不当な裁判を受け、ピラトにも見放され、鞭打たれ、あざけられ、ののしられても、十字架にかかってくださったからこそ、私たちの罪は赦されたのです。毎日、この十字架の愛に感謝しよう。そして、この愛に応えて生きていこう。もし、まだ心の中に罪があることに気がついたら、すぐにお祈りしよう。